

曾我部共生・浦部美佐子・渡邊輝世. 2014. ミシシippアカミミガメが彦根城中堀に自生するオニバス群落に与える影響の検証. 地域自然史と保全 36(2):95-108.

谷口真理・上野真太郎・三根佳奈子・亀崎直樹・角道弘文. 2021. 閉鎖水域における外来種ミシシippアカミミガメの駆除実施計画の策定とその実効性の検証. 農村計画学会論文集 1(1):17-28.

## 佐鳴湖周辺での淡水ガメの調査・保護・駆除活動

岩崎海渡<sup>1</sup>・夏目恵介<sup>2</sup>・戸田三津夫<sup>1,2</sup>

<sup>1</sup> 432-8561 静岡県浜松市中央区城北3-5-1 静岡大学 工学部

<sup>2</sup> 430-0906 静岡県浜松市中央区住吉5-10-15 昆虫食倶楽部

Conservation activity of freshwater turtles in Sanaru Lake, Shizuoka prefecture.

By Kaito IWASAKI<sup>1</sup>, Keisuke NATSUME<sup>2</sup> and Mitsuo TODA<sup>1</sup>

<sup>1</sup>Faculty of Engineering, Shizuoka University, 3-5-1 Johoku, Chuo-ku, Hamamatsu, Shizuoka 422-8529, Japan

<sup>2</sup>Konchyushoku Club, 5-10-15 Sumiyoshi, Chuo-ku, Hamamatsu, Shizuoka 430-0906, Japan

### 佐鳴湖でのミシシippアカミミガメ駆除と、ニホンイシガメとクサガメの交雑調査

浜松市の昆虫食倶楽部は、2017年より浜名湖東側にある汽水湖「佐鳴湖」流域でミシシippアカミミガメの駆除と淡水ガメの捕獲生息調査を行ってきました。佐鳴湖は長さ2km、幅600mほどの湖ですが、これまで、1200個体以上のミシシippアカミミガメを駆除し、かつては湖面にたくさん確認できたカメの頭はずいぶん少なくなりました。クサガメ、ニホンイシガメ、スッポンも捕獲し、ハナガメも3個体駆除することができました。活動をするうちに淡水ガメ情報交換会を通じてクサガメ問題を知りました。かつては捕獲したクサガメ、ニホンイシガメ、スッポンは戻していましたが、2019年以降はクサガメをフィールドに戻すことをやめました。しかし、浜松市でのクサガメの扱いが決まっておらず、地元の同意も得ていなかったこともあり、昆虫食倶楽部が軽々に殺処分することがはばかられました。そこで、個人宅で生体保存を継続していますがそろそろ限界にきていることから、管理できる安住の地を模索し、佐鳴湖近くのマンションの調整池、佐

鳴湖公園ビオトープ、浜松市動物園の調整池などの使用を折衝しましたが不調に終わっています。今のところ、行政は駆除とも保護(管理飼育)とも方針を明示していません。

クサガメの最大の問題は、交雑によるニホンイシガメの遺伝子攪乱です。したがってニホンイシガメを保護するためには生息域からクサガメを排除する必要があります。これまでの昆虫食倶楽部の活動の中でも、ニホンイシガメともクサガメとも雰囲気が違う個体がいづつか捕獲されていました。そこで、2022年に外見が典型的なクサガメ、ニホンイシガメとともに、交雑個体と思われるものの遺伝子解析を行いました。Suzuki et al. (2014)に準じ、核遺伝子C-mosと、チトクローム遺伝子cyt-bの解析を行い、C-mosがニホンイシガメ型、cyt-bがクサガメ型のもの4個体を見出し、佐鳴湖流域でも交雑が起こっていることがわかりました。ただし、まだ解析の高い精度が担保できていないので暫定的な結果です。そのほかにも、外見が交雑個体、C-mos、cyt-bがともにニホンイシガメ型のもので複数いましたので、F1とニホンイシガメの間に生ま

れた個体,あるいはその子孫である可能性があります。

昆虫食倶楽部では,佐鳴湖での淡水ガメの生息調査と侵略的外来種の駆除を2023年も継続します。捕獲のたびに餌わな数と同程度の20個体くらいが捕獲されますので,しばらくは継続する必要がありますと考えています。淡水ガメの活動は,昆虫食倶楽部で並行して進めている中高生向け生物多様性連続有料講座:「ガチ!生物多様性塾」,生物をとって料理して食べる体験講座:「とって食べる」とも連動させています。

#### 湖西市新居関所 史料館のニホンイシガメ細工品

新居関所史料館で見かけたニホンイシガメの火薬入が気になっていました。また,二階には,たばこ入れも。写真撮影が禁止とのことだったので,湖西市に申請して撮影許可をいただき撮った写真を絵葉書仕立てにして,神戸での淡水ガメ情報交換会で配布しました。皆さん,浜松周辺にお越しの際には新居関所に足を伸ばしてみてもはどうでしょうか。

#### アライグマばかりではない,カメの敵

昆虫食倶楽部ではクサガメを生体保存していますが,私の自宅で飼っているカメがいなくなることがときどきありました。去年は幼体のみの被害で,網もフタもしていない水槽の中にいたはずのクサガメ,ニホンイシガメ,ミシシippアカミミガメの幼体

が消え,水槽の外にミシシippアカミミガメの甲羅だけ一つが落ちていました。トレイルカメラを仕掛けたところ,味をしめて再びやってきたと思われるハシブトガラスが写り,成体もやられました。

それ以後,幼体の水槽には網をかけるようにして被害はなくなりました。ところが,今年になって,3歳以上のクサガメを入れてあったスイレン鉢から3個体が消え,容器に網をかけ再びトレイルカメラを仕掛けましたが,犯人は写りませんでした。しば



図1. ニホンイシガメ細工品 (新居関所所蔵)

図2. クサガメ成体を襲うハシブトガラス

らくして、今度はプラスチックのタライに入れてあった成体のクサガメが忽然と消えました。仕掛けてあったトレイルカメラが捉えていたのはハシブトガラス。犯行時刻は11:30頃の白昼。水槽からクサガメを出したところは写っていなかったため、水槽の中で犯行に及んだのか持ち出してから襲ったのかわかりませんが、写真ではすでに首とおぼしき部分は骨になっていて、ハシブトガラスの攻撃力の高さがうかがえます。その後、持ち去ったのがハシブトガラスなのかネコなのかはわかりませんがクサガメの体はどこかに消えました。カメは甲羅があって一定の防御力があるようですが、哺乳類や鳥類に襲われれば逃げるチャンスがあまりない弱い存在であることがあらためてわかりました。す

ぐに水中深く逃げられる場所でないと生き延びるチャンスは小さいようです。ニホンイシガメに対するアライグマの被害が各地から報告されていますが、そればかりではありません。皆さんも、飼育されているカメが襲われないようにお気をつけください。

#### 引用文献

Suzuki, D., Yabe, T., and Hikida, T. 2014. Hybridization between *Mauremys japonica* and *M. reevesii* inferred by nuclear and mitochondrial DNA analyses. *Journal of Herpetology* 48(4):445-454.

---

## 甲府市遊亀公園附属動物園におけるカメ類の個体群集

武井郁<sup>1,2</sup>・野田英樹<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 409-0193 山梨県上野原市八ッ沢2525 帝京科学大学 生命環境学部 アニマルサイエンス学科  
<sup>2</sup> 現所属: 101-0046 東京都千代田区神田多町2-1-4F 株式会社アミーゴ

The population of freshwater turtles in Yuki Park Zoo Kofu city, Yamanashi prefecture.

By Kaoru TAKEI <sup>1,2</sup> and Hideki NODA <sup>1</sup>

<sup>1</sup> Department of Animal Sciences, Faculty of Life & Environmental Sciences, Teikyo University of Science, 2525 Yatsusawa, Uenohara, Yamanashi 409-0193, Japan

<sup>2</sup> Present address: Amigo Co.,Ltd., 2-1 Kandata-cho, Chiyoda, Tokyo 101-0046, Japan

---

### はじめに

現在、日本本州にはクサガメ *Mauremys reevesii*、ニホンイシガメ *Mauremys japonica* (以下イシガメ)、ニホンスッポン *Pelodiscus japonicus* (以下スッポン) の3種の在来ガメが生息していることが知られている。近年では外来種として北アメリカ大陸から日本に移入してきたミシシッピアカミミガメ *Trachemys scripta elegans* (以下アカミミガメ) が生息するようになった(亀崎, 2015)。原因として、ペットとして飼育していた個体の放逐がある(亀崎, 2015)。また、放逐されたアカミミガメは繁殖能力や環境適応能力の高さによ

生き残り、日本各地で生息が確認されるほど個体数を増やし、在来ガメとの競合や在来生物の大量捕食など日本の生態系バランスを乱している(環境省, 2021)。

クサガメも江戸時代頃に朝鮮半島や中国から渡ってきた種であることが明らかになった(Suzuki et al., 2011)。その後、外来種として扱われることもあるが、ここでは在来種として扱う。

アカミミガメは都市公園の池でも確認されている。例えば、長野県長野市の住宅街に隣接する善光寺には、カメが生息する池がある。ここでは放逐によってカメが増えており、アカミミガメ、クサガメ、イ